

年間第9週・水曜日

75. 私たちは体ごと復活する

— イエスがはっきりお教えになった信仰の真理。 — 栄光の体の特質と能力。 — 体と靈魂の一致。

2024/06/05

年間第9週・水曜日

75. 私たちは体ごと復活する

— イエスがはっきりお教えになった信仰の真理。

— 栄光の体の特質と能力。

— 体と靈魂の一一致。

75.1 イエスが明確に教えた信仰の真理

復活を信じないサドカイ派の人々がイエスを困らせるために近づいてきました。古代のモーセの掟によれば、「ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の後継ぎをもうけなければならぬ」¹。そして最初の息子に亡くなつた人の名前をつけなければなりません。サドカイ派の人々は、死者の復活への信心を笑いものにしようとします。だから、彼らは巧妙な仮説を作り上げました²。女が7回結婚し、次々にやもめとして残されるなら、天国では誰の妻になるでしょうか？イエスは彼ら

の考えの浅はかさをはっきり示すように答えられ、死者の復活の真理を述べておられます。イエスは旧約聖書からいくつもの出来事を取り上げて、復活した身体の特徴を詳しく説明し、サドカイ派の人々が差し出した異論をすべて論破されます³。

主は、彼らが聖書を知らないために神の力を認めないことを非難されます。この復活の真理はすでに啓示されたものにはっきりと表されているからです。イザヤは預言しました。

「あなたの死者が命を得、わたしのしかばねが立ちあがりますように。塵の中に住まう者よ、目を覚ませ、喜び歌え。あなたの送られる露は光の露。あなたは死靈の地にそれを降らせられます」⁴。マカバイの母は、殉教の時、聖書の言葉を思い出させて、息子たちを励ました。「世界の造り主は、憐れみをもって、靈と命を再びお前たちに与えてくださる。それは今ここで、お前た

ちが主の律法のためには、命をも惜しまないからだ」⁵。また、ヨブにとってこの同じ真理は恵まれない日々の慰めになるものでした。「わたしは知っている。わたしを贖う方は生きておられ、ついには塵の上に立たれるであろう。この皮膚が損なわれようとも、この身をもって、わたしは神を仰ぎ見るであろう」⁶。

私たちは、自分の靈魂に希望の徳、特に神を仰ぎ見る希望の徳を培っていかなければなりません。愛する者はお互に見つめようとします。愛する人々は、その人だけを見ようとします。それは必然的です。人の心はこの必要を感じます。もし、イエス・キリストのみ顔を見つめたいという熱意を否定するなら、嘘を言っているに違いありません。「主よ、私はあなたの顔を捜し求めます！」⁷ この望みは、私たちが忠実であればかなえられるでしょう。神はご自分の被造物である人間に関心を持つ

ておられるので、使徒信条の基本箇条の一つである真理、身体の復活を保証しておられます⁸。もし「死者の復活がなければ、キリストも復活されなかつたはずです。また、キリストが復活されなかつたのなら、私たちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です」⁹。「教会は死者のよみがえりを信じますし、この復活は、人間全体について言及されていることも理解しています」¹⁰。また教会の神秘体についても然りです。教導職で教会は、私たちがこの世で過ごしていた時に生き、存在し、動いたその同じ身体が復活することを、数多くの機会に繰り返して教えています¹¹。2つの信条、「死者の復活」と「身体の復活」は、初代の教会の全く同じ伝統に由来する互いに補足し合う表現です¹²。この2つの表現は継続して使われなければなりません。

典礼では、この慰めの真理を数多くの機会に繰り返しています。「キリストにおいて、復活の希望が輝き、死を悲しむ者もとこしえの生命の約束によって慰められます。信じる者にとって死は滅びではなく、新たな生命への扉であり、地上の生命を終わった後も天に永遠の住処が備えられています」¹³。神は栄光の内に永久に私たちを待っていてくださいます。この世しかないと思っている人々には何と大きな悲しみでしょう！恩恵の助けによって、イエス・キリストと共に、天使、聖人と共に永遠に生き、至高の三位一体を賛美するのは、靈魂と身体共々私たち自身だということを知るのは、何と大きな喜びでしょう！

私たちが、愛する者の死を深く悲しんでいる時、家族の一員を失って悲しむ人と共にいる時、希望と慰めで満たすこれらの真理、生命はこの地上で終わることではないこと、私たち

は永遠の生命において神に出会うために歩み続けていることを、人々の前で示さなければなりません。

75.2 栄光にあげられた身体の特性と能力

死後、それぞれ靈魂は身体の復活を待ちますが、それは、永遠に神の近くにいる天国とはるかに神から遠くにいる地獄のどちらかになるでしょう。天国では私たちの身体は異なる特性を持ちますが、それは継続して身体であり、キリストの栄光の御体と聖母の身体と同じように、特別な位置を占めることでしょう。私たちはこの場所がどこであるか、どのように見えるか分かりません。私たちが知っているこの地球は形を変えるでしょう¹⁴。「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています」¹⁵。生命を脅か

し、有害であるものはすべて消失するでしょう¹⁶。聖ヨハネは黙示録で証言しています。栄光に上げられる者は、「もはや飢えることも渴くこともなく、太陽も、どのような暑さも彼らを襲うことはない」¹⁷。黙示録に記録された苦しみは、砂漠をさまよった時、イスラエルの民に最大の災難を引き起こしたものです。投げやりのように襲った、焦げつくよう熱い太陽光線、彼らは疲れ果て、乾燥した砂漠の風は力を消耗させました¹⁸。このような大変な艱難は、新しい神の民である教会が、最終的な家に向かう巡礼の続く限り、耐え忍ばなければならぬ苦しみの象徴です。

身体が栄光を受けることへの信仰と希望によって、私たちは、身体に当然与えるべき価値と敬意を持つようになります。人間は、「身体を良いものと見なし、敬意を抱く義務があります。神がそれを創造され、終わ

りの日に天に上げられるからです」¹⁹。それにもかかわらず、現代、私たちが度々出会う身体に示される敬意は、どれほど正しい評価からかけ離れていることでしょう。確かに、私たちには自分の身体に気をつけ、病気、苦痛、空腹などを避ける適切な手段を使う義務があります。しかし、終わりの日に、再び復活しなければならないことを忘れずに。重大なことは、地獄ではなく、天国に上げられるべきだということです。健康より大切なことは、私たちの生命に関する神のみ旨を忠実に受け入れることです。身体の安寧に不相応な懸念をしてはいけません。私たちが受けるかも知れない苦しみや困難をどのように超自然的に受け入れるべきかを知るべきです。痛みや苦しみを避けるための通常の手段を落ち着いて使うと共に、それらを超自然的に活用し、天国の栄光において決定的で十全になるが、今は相対的で一時的な善に過ぎないものに心を惹か

れて、喜びと平和を失わないようにしましょう。私たちは旅の目的地と私たちの心を占めているものの真の値打ちを、一瞬たりとも忘れてはなりません。私たちの目的地は天国です。靈魂と身体は、キリストと共にいるために神に創られたものです。こういうわけで、「この世での私たちの最後の言葉とは何でしょう？それは微笑みと楽しい歌だけしかありません」²⁰。一方では、主が両手を広げて喜んで私たちを迎えておられます。

75.3 身体と靈魂の一致

この世の身体と変容された身体には大きな違いがあるのですが、その間にはなおもまだ密接な関係があります。復活した身体はこの世で生きているときの身体と同じ具体的な体です²¹。

靈魂の本質と聖書の何節かを根拠として、キリスト教の教えは、身体の

復活と、復活した身体が靈魂と一つになることを教えています。第一に、靈魂は人間の一部にすぎず、体から離れれば、一人の人間全体が持つ完全で完璧な喜びを持つことはできません。さらにそのうえ、靈魂は身体とひとつであるように創られているので、根本的な分離はその相応しいあり方に反します。靈魂だけでも身体だけでもなく、靈魂が身体と両方一緒に、一靈魂と身体とが揃った完全な人間が—この世での生き方に見合った褒美や罰を受けることは（身体の復活の瞬間を待たずに、死後、すぐに褒美や罰を受けることが信仰箇条であるけれども）、神の知恵、正義と憐れみにもっと一致していることです。

教会の教える光に照らしてみると、身体は、靈魂の単なる道具ではないことがわかります。神のお望みによって、人間は、身体を通して、支配し、働きかけ、聖化すべきこの世

の現実に接していることがわかります²²。身体を通して、人は社会的共同体を築き上げ進歩させるために、他の人々と話し合ったり仕事をしたりすることができます。人間は、身体を通して秘跡の恩恵を受けることも、また、忘れてはいけません。

「あなたがたは、自分の体が、キリストの体の一部だとは知らないのか」²³。

私たちは肉と血からなる男女ですが、前もって、栄光ある復活が期待され、確かにそうなると預言されているように身体も同様に恩恵を受けるのです。恩恵の状態にある限り、聖霊の神殿である私たちのこの身体が、神によって栄光を受けるように定められていることを頻繁に考えるなら、キリストに従う者の尊厳と態度を持って生きるための大きな助けになるでしょう。今日、聖ヨセフに向かい、他人と自分に対して健全で相応しい敬意をもって生きるよ

うに教えてくださいと願いましょう。この地上で生活をしている間に所有している身体は、神の言いようのないほど素晴らしい栄光を永遠に共有するように定められているのです。

(フランシスコ・フェルナンデス・カルバハル『神との対話』)

¹ 申命記 25：5

² マルコ 12：18－27 参照

³ The Navarre Bible, note on Mark 12：18－27 参照

⁴ イザヤ 26：19

⁵ 2マカバイ 7：23

⁶ ヨブ 19：25－26

⁷ 聖ホセマリア・エスクリバー,
Quoted in Newsletter No. 1

⁸ Symbolum Quicunque ; Dz 4 0 :
Benedict XII, Encyclical Letter,
Benedictus Deus, 2 9 January 1 3
3 6 参照

⁹ 1 コリント 1 5 : 1 3 – 1 4

¹⁰ Congregation for the Doctrine of
the Faith, Letter about some
matters referring to eschatology, 1
7 May 1 9 7 9

¹¹ Eleventh Council of Toledo, year
6 7 5, Dz 2 8 7 (5 4 0) ; cf
Fourth Lateran Council, chap. 1,
On the Catholic Faith, Dz 4 2 9 (8
0 1) etc.

¹² Congregation for the Doctrine of
the Faith, Declaration about the
translation of the article ‘carnis
resurrectionem’ of the Symbolum

Apostolicum, 14 December 19
83 参照

¹³ Roman Missal, Preface of the
Dead 1

¹⁴ M.Schmaus, Dogmatic Theology,
vol. VII, The Last Things, p. 514
参照

¹⁵ ローマ8：20

¹⁶ M.Schmaus, op cit, Vol.VII, p. 2
25 et seq 参照

¹⁷ ヨハネの黙示録, 7：16

¹⁸ シラ書43：4；Ps121：6；
Ps91：5－6 参照

¹⁹ 第2バチカン公会議, 現代世界憲
章, 14

²⁰ L.Ramoneda Molins, Untattered
Winds, Montevideo, 1984

^{2 1} Dz 2 8 7, 4 2 7, 4 2 9, 4
6 4, 5 3 1 参照

^{2 2} 創世記, 1 : 2 8 参照

^{2 3} 1 コリント 6 : 1 5

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <https://opusdei.org/ja-jp/article/TOKYO-sui/> (2026/02/02)